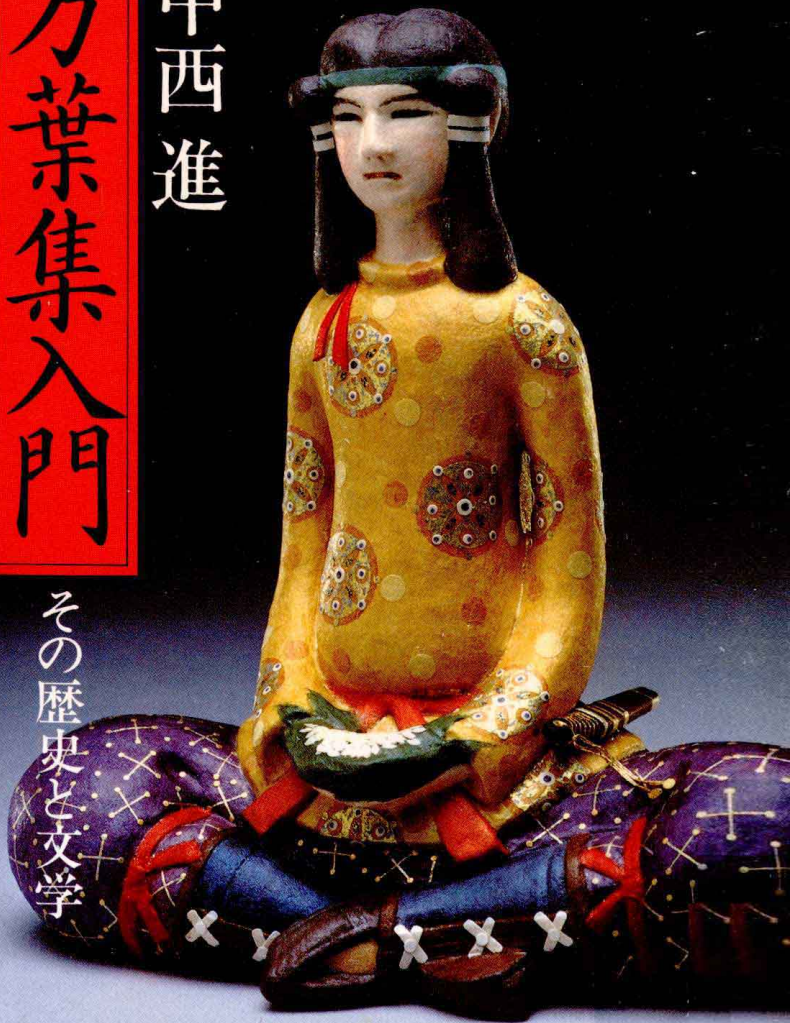


中西進

万葉集入門

その歴史と文学



万葉集入門

なかにしすすむ
中西進



角川文庫 4725

昭和五十六年三月二十五日 初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三
電話東京二六五―七二二―（大代表）
〒一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——晁印刷 製本所——多摩文庫

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0195-326801-0946(0)

万葉集入門

その歴史と文学

中西進



角川文庫 4725

目次

一 古代の歌々

古代の追憶

追憶の風景

磐姫の人間像

王者と恋

人間誕生

大化前夜

二 大化の改新

蘇我氏挽歌

中大兄と鎌足

雨の六月十二日

石川麻呂の変

三三 元 七 七 四 〇 七 四 二 九 九

中大兄の周辺

有間皇子の悲劇

三 近江文化

日本敗戦

中大兄の即位

額田王

葬送の女たち

四 壬申の乱

天智の死

激戰一か月

淨御原宮の十四年

大津皇子事件

五 藤原の新都

持統即位

吳

天

四

四一

44

四六

五〇

五

五

五五

五九

六

和

七

女の死

石見の離別

行幸從駕

羈旅の短歌

人麻呂歌集

七 平城の榮華

大宝以後

女帝と新都

平城京の出現

律令撰定

元正女帝

聖武の即位

八 百花繚乱

山部赤人

車持千年

一一一

一一五

一二七

一三〇

一三三

一三六

一三八

一三〇

一三三

一三五

一三六

一四二

一四四

一四四

一四七

笠金村

大伴旅人

旅人の周辺

山上憶良

高橋虫麻呂

湯原王

九 天平の陰翳

長屋王の変

藤氏四子

聖武の幻想

聖武の死

奈良麻呂の変

十 みやびの抒情

平城京の日々

恋の真実

一四

一五

一六

一七

一八

一九

二〇

二一

二二

二三

二四

二五

二六

二七

二八

二九

たゆとう命

田辺福麻呂

詩と歌

坂上郎女

大伴家持

十一 無名歌の世界

万葉集と作者未詳の歌

都会の民衆

東歌

防人の歌

古今集への流れ

解説

前登志夫

一六

一八

一九〇

一九三

一九五

二〇一

二〇二

二〇三

二〇五

二〇九

二一〇

二二三

一 古代の歌々

古代の追憶

万葉集二十巻に収められた四千五百余首の歌は、第一巻のはじめから、年代を追って並べられているわけではない。万葉集の各巻々は、ほとんど一卷ずつ、時としては数巻を単位として、まとめられ構成されている。したがって、そのおのおのにおいては年代順に歌を並べてはいるけれども、すべての万葉の歌を年代順に考える場合は、いろいろの巻から歌を連れて来て並べかなければならない。こうした未完成ともいえる、ある混沌こそ、実は万葉集の一つの特色なのだが、さて、こうした手続きによって歌々を年代順にとり出すなら、それは磐姫皇后の歌、雄略天皇の歌、聖徳太子の歌などが古い時代の歌である。以後舒明天皇の歌、皇極天皇時代の歌などにおいて、七世紀後半の歌群に引きつがれていく。

磐姫皇后は五世紀初頭の人物である。したがって皇極朝以後の七世紀後半までには百五十年あまりの隔たりがあり、その間に右にあげた雄略以後の人々の歌が存在することとなる。万葉集は、こ

の七世紀後半から陸^{りく}統^とと歌を登場させ、それは以後八世紀ほぼ全般にわたるとも考えられる。その中で年代のはっきり記^しされた歌は八世紀の半ばまでのものなのだから、この百年ないし百数十年の四千余首に比べれば、皇極朝以前の歌というものは、前万葉期の歌だと考えてもよいであろう。これを、今、万葉の古代の歌々と名づけておこう。

そして、実はこれを古代の歌々だと考える理由は、もう一つある。右にも述べたように磐姫は五世紀初頭の人間であり、雄略は五世紀の末ごろの人間である。このころに、今見られるような歌が、このような形で存在したかどうかは、実ははっきりしないのである。はっきりしないどころか、それはかなり疑わしくさえある。そして万葉集あるいは広く古代和歌の一つの特性として、歌の伝承ということもある。つまり彼らは歌を記録することなく、口頭から口頭へと歌を伝えつづけたのであって、それはけっして原形を保証することがない。その口誦の時点時点で、新たな感情にささえられて歌は存したのであって、そこには、ひょっとすると仮想の作者が生まれなかつた。

後に述べるように磐姫も雄略も、そしてまた聖徳太子も著名な人物である。その周辺に数々の物語をまとうて存在した人物であり、彼らのまわりに口頭の伝承を考えることはたやすい。この物語の伝承の中に歌は存在したのであって、万葉集に見られるこれらの歌は、実際の時代よりもずっと後の時代に、口誦された歌であろう。逆の言い方をすれば、後の時代の人々の、遠い古代の人々の追憶の中に誦した歌々が、当面の歌々なのである。聖徳太子は万葉びとにとってもごく身近な存在

であつたし、舒明天皇の時代はつい先ごろの話ではあつたが、本格的な万葉の時代およびその歌にとっては、彼らは何らかの意味において、古代を背負っていることは、右の人々と変わらない。七世紀半ば、あの大化の改新とよばれる政治の変革のあつた六四五年以後を眞の万葉の時代と認めて、それ以前の歌を古代の歌々と考えゆるゆえんである。

追憶の風景

さて、こうして大化以後の万葉びとの古代であつた時代は、彼らにとつてどのような歴史時代であつたのだろう。われわれは中国の史書、魏志（ぎし）に加えられた倭人伝（わじんでん）によつて、もつとも古いわが国の状態を、かなり正確に知ることができるが、そこに登場する有名な日本の王者たちに、いわゆる「倭の五王」なるものがある。讃・珍・濟・興・武と称せられる五人であるが、彼らはそれぞれ、仁徳・履中・反正・允恭・安康・雄略の六人の内の五人に比定されている。つまりこの五王たちは、いわゆる応神・仁徳王朝（河内王朝ともいう）の人々であり、磐姫は仁徳の皇后だから、万葉は「倭の五王」時代の二人を、もつとも古代の人間として据えていることになる。

倭の五王は、単に中国の史書にその名が登場するといふだけの意味をもつのではない。わが国が正確な姿で歴史を見せてくれるのは、この五王時代以後であつて、それ以前、四世紀までの日本は、伝説の霧の中に、謎に包まれた姿しか見せてくれないのである。三世紀のことと考えられている邪

馬台国^{またいく}は、例のと通りの論議の中に実体を明らかにしては来ないし、四世紀はいっそうに謎の世紀である。

このありさまは、古事記の記事に照らしても同様である。古事記は上・中・下の三巻からでき上がっているが、上巻は神々の時代であり、中巻は神武天皇という初代の天皇から応神天皇までのことを記し、下巻は仁徳から推古天皇までの記事である。すなわち倭の五王時代は中巻を閉じて、新たに筆を起こした下巻以後に相当するのであって、古事記がそれ以後に詳しい記述を見せるのに対して、中巻の諸伝承は断片的な物語である。そうした形によれば、五世紀以降、五王時代以後に日本の具体的な歴史が始まっているといえるだろう。

応神王朝はいろいろな意味で問題になる王朝である。この王朝はそれに先立つ神武王朝に代わったもので、この新王朝を外来の征服王朝だと説く歴史家もいるほどである。また、この応神王朝にとって代わったのは六世紀の継体王朝^{けいたい}なのだが、その継体は応神の五代目の孫だといっている。継体という新たな支配者がかく称することによって、おのが立場を保有しようとしたほどに、応神は王者の血のはじまりだったのである。

ところが、雄略は、この応神王朝のほぼ終焉期^{しゅうがんき}に存在した天皇である。雄略はその名のごとく武勇にたけた天皇であったが、自らに対抗する市辺忍鹵王^{いちのへのおしのおう}を殺してしまう。そのため自らの子清寧^{せいねい}に子がなく皇位継承者がいなくなると、忍鹵王の子で、父が殺されたときに逃げのびていた顕宗・仁賢^{けんけん}が次の皇位を襲い、その子の武烈^{ぶれつ}において、ついにこの皇統は継体に後を譲るといふ形になる。

そこにこの応神王朝の幕がおりるのだが、そうしてみると雄略は自らの手によってこの王朝の幕をひいた人物のように思える。万葉集はこうした応神王朝の中から、最初の仁徳の皇后である磐姫と、終幕の立役者雄略の歌とを載せるのである。

古事記は、先に述べたように仁徳から下巻をはじめ、推古天皇までの記事を載せる。しかし物語を載せるのは仁賢までである。仁賢の後、武烈以降は、世に帝紀と称せられる、天皇をめぐる项目的な記事のみである。ここに見られる物語の欠如は、また万葉が雄略以後推古朝の聖徳太子まで歌を載せないことと、不思議なまでに一致しているだろう。後にも述べるように、聖徳太子は一つの新しい時代をひらいた人物である。その新時代は大化以降の万葉時代に引きつがれ発展していく。そこに古事記が筆をとめ、万葉もまた太子の歌一首を載せるのである。

こうして見ると、万葉が古代の歌々として載せるものは、けっして偶然のものではなくて、万葉びとの思慕が古代にさかのぼったときに、ある必然をもつて採択されたものであったということがわかるだろう。六世紀の歌を一首もとどめないことは、この古代思慕が必然的なものであり、確かな歴史の認識の上に立ったものであったことを教えてくれる。そして、万葉がこれら古代の歌々から始められるということは、一貫した意識的しぐさではないにしても、無意識であればこそいっそう強固に、古に返りゆく心意の中から、徐ろに抒情の花をひらかせていった経緯を、物語っていることになるのではないか。

磐姫の人間像

こうして万葉集に最初に迎える主人公は、仁徳の皇后磐姫である。古事記および日本書紀によれば磐姫は葛城かき襲津彦あつひこ（曾都比古そつひことも見える）の娘であり、最近の史家の研究によって襲津彦の實在はたしかめられている。万葉集では、

葛城の 襲津彦真弓 荒木にも 憑めや君が わが名告りけむ （巻一一、三六元）

という歌の中に登場する。わたしを頼りになる者だと思つてわたしの名を人に言つたのだろうかという、自分たちの恋を公にしてしまった男に対する女の歌だが、その頼りになることの比喩として襲津彦の持つ弓のような、新しい木の弓といっているのであつて、こうした奈良朝後期に生きた庶民の間にまで伝えられた、武将の名がそれであつた。書紀には三度新羅征伐に従つた記事が見えるが、これも同じ武勇の伝承である。

この襲津彦を中心とする葛城氏は、当時の大和における最大の豪族であつた。あの二上山ふたがみを北端として吉野に連なる峻嶒しゅんざう葛城連山は、つねに悠然と大和の西の空をくぎっている。早春のころ、大和の他のいかなるものも春のいそぎの中にあるのに、ひとり葛城連峰のみが残雪を輝かせているのを、わたしはしばしば見た。あるいは晩秋、夜ひとよを冷気がしみ渡ると、翌朝は葛城連峰ばかりが白くよそおわれているのに、しばしば逢つた。その峰の動かしがたい巨大さは、さながら当時の

葛城氏の力であった。

天皇家はこの葛城の力と結託することなくしては、王権の樹立がかなわなかった。磐姫という一人の女性が仁徳のもとに嫁いだのは、そうした政略結婚の一つだったのである。だからこの磐姫には、多くの敵対者があった。第一に吉備の海部直の娘で黒髪も美しい黒日売、当時大和の東北部に位置してこれまた大きな力を誇った和珥氏の血を引く八田皇女・女鳥王という仁徳の庶妹、また日向諸君の娘たる髪長日売らが仁徳の妻として知られている。磐姫はこれらの中にあつて、大氏族葛城を背後にせおう皇后だったのである。

この多くの后妃の中に仁徳をめぐる愛の葛藤が無からうはずはない。古事記や日本書紀はそれを磐姫の嫉妬という形で伝えている。たとえば天皇がその妾に口をきくと、「足もあがかに嫉妬したまふ」といい、黒日売はそれに堪え難くて本国に逃げ帰る。また磐姫の留守をいいことにして仁徳が八田皇女を宮中に召すと、それを聞いた姫は神事に使うために採り集めて来た柏の葉を、ことごとく海中に捨ててしまふ。そしてそれ以後けつして宮中に戻ろうとはせず山代の筒木の宮（いまの京都府田辺町のあたり）にいて、たずねて来た天皇にも会おうとしない。日本書紀では姫はそのままこの地に没することになっているが、この時、古事記では奈良山の山口において、書紀では奈良山を越えて、遙かに葛城を望んで次のように歌ったという。

つぎねふや 山背川を 宮上り わが上れば あをによし 奈良を過ぎ 小楯 大和を過
ぎ わが見が欲し国は 葛城高宮 我家のあたり （仁徳記）